

社会調査における「精度」

巻頭言

学生の頃、大学の周辺に古本屋が何軒かあったのでよく立ち寄った。そのうちのある古本屋の棚に老大家による社会学の体系論が書かれていた本が非常に安価な値段で売られていて、その隣に日本の農村のある制度的慣行について精細に記されたモノグラフの本が、すでに出版されてから時を経ているにもかかわらず高価な値段がついて売られていた。このことを後日ある先輩に話したところ、彼が「理論や学説は、はやりすたりがあるから、時が経つと誰も見向きもされなくなるが、調査された事実はいつまでも変わることがないから、かえって後になって値打ちが出てくるものがあるのだ」と語ったことをおぼえている。このことはただ調査したものはすべてそうだというわけではない。それにはいくつかの条件がある。その1つに調査の「精度」ということがあげられる。たとえば質的調査においてはそこで描かれた調査対象の情景が目には浮かぶぐらいの精度が求められる。この点参考になるのは、私がこれまで関心を寄せてきた「シカゴ・モノグラフ」と呼ばれる一連の著作である。これらの著作は1920年代から30年代にかけてシカゴ学派を築いたパークとバージェスの指導のもと、大学のおかれた急速に膨張するシカゴをフィールドにして都市特有の現象——スラム、ホームレス、売春、風俗店、非行集団、組織犯罪などを対象にして若き社会学者によって調査されたモノ

社会調査協会理事 中野 正大

グラフである。これらのモノグラフの主題となったそれぞれの社会的世界が、エスノグラフィという調査手法にもよるが、リアルで臨場感溢れ、そこでの人々の顔の表情や、息遣いが聞こえてきそうな叙述で描かれている。このため時を経た今なお色褪せることなく読む人を引き付けている。

こうした調査の精度は質的調査だけでなく、量的調査においても要求される。それは「調査の過半数がゴミである」とセンセーショナルな見出しで書かれた本が話題になっているように、杜撰な調査や世論調査で近年多用されているRDD方式とよばれる電話調査が果たして正しく母集団を代表しているのかといった調査における精度の問題がある。こうした社会調査の質的向上を果たす情報発信誌としての役割を本誌に期待したい。

もう1つ本誌にお願いすることがある。それは本誌でもすでに紹介させていただいたように、私の勤める奈良大学で全国に先駆けて社会調査学科を開設した。そこで分かったことは私たち社会調査に関係する人は別にして、高校生や一般の人において社会調査に対する認知度がきわめて低いということだ。今後本誌が社会調査のいわば広告塔としての役割も果たしてもらいたくお願いしたい。